

『新五代史』 世家訳註稿 (二)

伊藤宏明

『新五代史』 卷六一

吳世家第一

楊行密 (前号) 子・渥 隆演 溥 (本号)

渥は、字は承天、行密の長男である。行密は、病になったとき、渥を「地方に出して」宣州觀察使に任命した。「その際に」右衛指揮使徐温<sup>(五二)</sup>は密かに渥に言った。

「今、王は病の床にあっても嫡子を地方に出されました。必ず奸臣の悪巧みがあるに違いありません。もし他日あなたさまを召されるようでしたら、温の使者でなければ命令に応じてはなりません」

渥は涙し、温に感謝して去った。行密は病がひどくなったため、判官周隱<sup>(五三)</sup>に命じて命令書をつくらせ渥を呼び寄せようとした。「しかし」隱は、渥が幼く弱々しくて事業を任せられないことを心配して、旧将のうちで威光と人望があ

る者を任用して渥に代わって軍政を司らせることを行密に勧めた。そこで大将の劉威を推薦したが、行密は決めかねていた。温と嚴可求<sup>(五四)</sup>が見舞いに参上した際に、行密は隱の意見を知らせた。温らは大変驚いて、直ぐさま隱の所に行つて事態を協議しようとした。隱がまだ出て来なかつたので、そこで温は、隱が呼び出しの文書を作成してまだ机の上に置いてあるのを見て、急ぎそれを取つて「渥に」送つた。渥は温の使者に会い、そこで出立した。行密が亡くなつたので、渥は跡を継いで位に就き、周隱を呼び出して罵つた。

「おまえは我が国を売ろうとしたヤツだ。再びどの面さげて、楊氏に会おうとするのか、会えはしまい」  
遂に隱を殺した。王茂章を宣州觀察使に任命した。

渥が「広陵に」入城するに際して、宣州の倉の物資を多く運んで広陵に持ち帰ろうとしたが、茂章は物惜しみして与えなかつた。渥は怒つて、「馬歩軍都指揮使」李簡<sup>(五五)</sup>に命じて五千の兵で宣州を包圍させた。「天祐三年(九〇六)正月」  
補註(二) 茂章は錢塘に逃れた。

天祐三年(九〇六)二月、劉存は岳州(湖南省岳陽市)を取つた。四月、江西「節度使」の鍾伝が亡くなり、その子匡時<sup>(五六)</sup>が代わつて位に即いた。「しかし」伝の養子である延規<sup>(五七)</sup>は即位できなかつたことを怨んで、兵で匡時を攻めた。渥も「西南行營招討使」秦裴<sup>(五八)</sup>を派遣して、兵を率い、匡時を攻撃させた。九月、洪州(江西省南昌市)に勝利し、匡時と部下の司馬である陳象<sup>(五九)</sup>を捕らえて帰還した。象を市(処刑場)で斬り、匡時を赦免した。秦裴を江西制置使<sup>(六〇)</sup>に任命した。

「後」梁の太祖は唐朝に取つて代わつて、開平という新しい年号を立てたが、渥は相変わらず「天祐」の年号を使用した。鄂州「觀察使」の劉存と岳州「刺史」の陳知新<sup>(六一)</sup>は水軍で楚を討つたが、瀏陽「県」(湖南省瀏陽県)で敗北した。「そこで」楚の軍は存と知新を捕らえて帰還した。楚王馬殷<sup>(六二)</sup>は以前から彼らの名声を聞いており、彼らを救おうと思つ

たが、存らは殷を甚だしく罵った。

「昔、宣城〔郡〕（宣州を指す）は我が刃の下に落ちた。今日の敗北は天が我を滅ぼしたのだ。わしがどうしておまゑに仕えて生を求めようか、いや求めはしない。わしがどうして楊氏に背こうか、背きはしない」

殷は服従させることができないと覚り、彼らを殺した。岳州はふたたび楚「の支配下」に入った。

当初、渥が広陵に入城しようとした際に、幕下の兵三千を宣州に留めて、腹心の陳璠（六三）・范遇（六四）に指揮させた。入城して位に即いてから、「渥は」徐温が親衛軍を統轄していることを憎んでいた。「そこで」璠ら呼び寄せて東院馬軍を編制し、自衛した。温と左衛都指揮使張顥（六五）は行密以来の子飼いの將軍であり、渥擁立の功績もあるので、共に璠らが彼らの権力を侵すのを嫌った。四年（九〇七）正月、渥が政務を執り行い、璠らがお側近くに付き従っていたが、温と顥は親衛軍を従えて進入し、璠らを引きずり降ろして斬り殺した。渥は阻止することができず、これによって政治の実権を失い、心の中からの憤りがまだ発散できないでいたため、温らはますます落ち着かなかつた。

五年（九〇八）五月、温と顥は盗人を遣つて寢所に侵入し、渥を殺させようとした。渥は盗人に、裏切つて温らを殺すことができる者をみんな刺史にしてやると説いた。盗人はみんな承諾したが、ただ紀祥（六六）だけは従わず、渥を捕まえて絞め殺した。その時、年齢は二十三歳であった。諡は景とつけられた。息子の隆演が位を即いた。溥が分をわきまえずに天子の位に即いたとき、渥に追尊して烈宗景皇帝とした。陵墓は紹陵という。

隆演は、字は鴻源、行密の第二子である。初めの名前は瀛で、またの名前は渭である。温と顥が渥を殺した当初、「彼らは」領地を分割して「後」梁に臣として従うことを約束していたが、渥が死ぬに及んで、顥は約束に背いて自ら位に即くことを望んだ。温がこの行動を心配して、食客の嚴可求に尋ねた。「そこで」可求は応えた。

「顥は強情でいじりでありますが、事を成し遂げることに通じていません。これは治めやすうございます」

明日、顥が剣や矛を役所内に列べ、諸将を呼んで会議で「今後の」政治上の事を相談しようとした「際に」、大将朱瑾より以下の者たちは護衛兵を退けてから「役所に」入った。顥は諸将に誰が位に即くべきかを尋ねたが、諸将は進んで応えなかった。顥が三度尋ねると、可求は前に進んで密かに申し述べた。

「今、周囲の国ざかいには心配事が多ございます。「したがって」あなた様でなければだめでございます。しかしながらこれをするにはあまりにも速すぎはしないかと心配しております。そのうえ、今、外には劉威・陶雅(六七)・李簡・李遇がおられ、皆様は先王と同等の方たちでございます。あなた様が自ら位に即いたとしても、この方たちがへりくだってあなた様にお仕えすることができるとかまだわかりません。幼い君主を輔佐する方がようございます。時をしばらく経って心から服従するのを待つてからがよろしいと存じます」

「しかし」顥は応えることができなかった。そこで可求は走り出て、一通の命令書をしたためて袖の中に入れ、諸将を率いて参上し、祝賀を述べたが、諸将はやっつていことがわからなかった。命令書を取り出して伝える段になって「みると」、驚いたことに渥の母・史氏(六八)の命令書であった。「それには次のように」述べられていた。

「楊氏が建国の基礎を興すことは苦しいものであった。しかも世継ぎの君が不幸にして亡くなられた。「したがって」隆演は順序に照らして位に即くべきである。楊氏に背くことないように諸將に教え、心より仕えなければならぬ」

文章の趣が激しく、聞く者は感動した。顥の顔には失望の色が見え、結局何もすることができなくて、隆演は位に即くことができた。

顥はこれによって温との間に亀裂が生じ、隆演が温を潤州に転出することを遠回しに勧めた。可求は温にいった。

「今、親衛軍をお捨てになって外郡に出られましたならば、災難が来ましよう」

温は思い悩んだ。そこで可求は顥に説いた。

「あなた様は徐温様と共に「楊行密様の」臨終に際して死後のことを託されました。「しかし」口さがない者が、あなた様が温の親衛軍を奪って温を外できつと殺すだろうと言っております。信でございますしや」

顥は応えた。

「事はもはや行われた。どうしてやめることができようか、できはしまい」

可求はいった。

「甚だ簡単でございます」

翌日、顥を連れて諸将と共に温「の所」まで行き、可求は温を責めるかのようによそおって言った。

「むかしの人は一度食事をふるまわれただけのわずかな恩義でさえも忘れないのですから、ましてあなた様は楊氏三代にお仕えした將軍であればなおさらでございます。今、幼い世継ぎの君が新たに即位されて多事多難の折りですので、住まいを外に求めて一時の安樂を楽しもうとなさるのですか」

温も謝るふりをしていった。

「貴公らが留められるのであれば、行こうとは思わない」

これによって行かずにすんだのである。行軍副使李承嗣は張顥と親しかったため、可求が温に付き従おうとする気持ちを持って覚りを覚り、刺客を放って夜に可求を刺し殺させるように顥に遠回しに言って勧めた。刺客は可求を刺そうとしたが、刺すことができなかった。翌日、可求は温「の所」まで行き、先に顥を殺すことを計画した。密かに鍾「泰」章(六九)に勇敢な兵士二十人を選ばせ、親衛軍指揮所に行き、顥を斬り殺した。そこで渥を殺害した罪を顥に負わせた。これによって温はひとり政治を思うように行い、隆演は位に即いているだけであった。

六年（九〇九）補註（三）、撫州「刺史」危全諷（七〇）は叛乱を起こして洪州を攻めた。「すると、」袁州「刺史」彭彦章（七二）、吉州「刺史」彭玕（七三）、信州「刺史」危仔倡（七三）もみな軍隊を動員して叛乱を起こした。隆演は嚴可求を召し出して誰を任命すべきかを尋ねた。可求は周本を推薦した。その時、本はちやうど蘇州を攻めて敗北して帰還したところであったので、恥じて出ることを承知しなかった。「そこで」可求は無理に本を起用しようとした。本は言った。

「蘇州の敗北はおじけづいたからではない。「それは」総大将の指揮権が軽くて、下の者の多くが上官の命令を待たずに勝手に軍事行動を取るだけなのだ。必ず任命されたならば、副将を任用しないでいただきたい」

そこで七千の兵を求めて象牙潭（江西省金溪県東北）で戦い、これを敗って、全諷・彦章を捕らえたが、玕は楚に逃れ、仔倡は錢塘に奔った。全諷が広陵に到着すると、諸将は論じ合って言った。

「昔、先王が趙鏗を攻めた時に、全諷はしばしば呉軍に食糧や兵糧を送り届けてくれた」

そのために放免して殺さなかった。全諷が兵を集めて戦いを始めようと望んだ当初、錢鏐は王茂章を「後」梁に送ろうとした。「その時、茂章は」全諷「の所」を経由し、立ち寄った。「そこで」言った。

「貴公が大軍を起こしたことを聞いた。ぜひ貴公の兵を見て成功するかどうかを知りたい」

全諷は軍を配置して、茂章と城に登りこれを眺めた。「その場で」茂章は言った。

「わしはずっと呉に仕えていたが、呉の兵は三等の「兵で強くない」。貴公のこの兵などはやっとな大将に太刀打ちできるだけだ。兵十万を増やすことができなければ、成功しない」

そして全諷はついにこの理由で敗れた。

八年（九一一）、徐温は昇州（江蘇省南京市）刺史を兼任し、水軍で昇州（江蘇省南京市）補註（三）を統治した。宣州「觀察使」李遇は行密の時から大将であり、勲位も非常にたかったので、温が権勢をふるっていることにいらだって、いつも

言っていた。

「徐温という輩はどんなヤツだ。わしはまだ見知っていないぞ。速くここに来い」

温はこのことを聞いて怒り、柴再用(七四)に兵をつけて王壇を送り、遇を交替させ、かつ召還させようとした。「しかし」遇は疑念を抱き、命令を受けなかった。「そこで」再用はこれを包囲した。「一方、」隆演は他郷出身の將軍である何堯に遇を諭して自分から帰還させるように命じた。そこで堯はいった。

「貴公が謀反を起こそうと考えているのならば、この堯を殺して皆に示せ。もしもともとそのような考えがないのならば、どうして堯につきしたがって出てこないのか」

遇は自分から謀反を起こそうとする考えがなかったので、堯に随って城を出た。「しかし」温は遠回しに再用に勧め、遇が出てくるのを待つて殺し、併せて彼の一族を皆殺しにさせた。

九年(九一二)、温は武官・文官を引き連れて隆演に太師・中書令・呉王につくように進め、温は行軍司馬・鎮海軍節度使・同中書門下平章事となった。「淮南節度副使」補註(四)陳章(七五)は楚を攻め、岳州(湖南省岳陽市)を取り、刺史の苑玫を捕らえた。

十年(九一三)、「呉」越の軍が常州(江蘇省常熟市西北)を攻めたが、徐温はこれを無錫「県」(江蘇省無錫市)で破った。「後」梁が王茂章を派遣して寿春「県」(安徽省寿県東南)を攻撃させたが、温は茂章の軍を霍丘「県」(安徽省霍丘県)で破った。

十二年(九一五)、徐温を齊国公に封じ、両浙都招討使に任命し、始めて潤州に拠点を置いた。息子の知訓を留めて行軍副使として、国政を執らせ、しかも重要な政務は温が遠く「任地から」これを決裁した。冬に楊林江(安徽省和県付近)補註(五)を浚ったが、水中から火を出して燃えた。

十三年(九一六)、宿衛の將軍李球<sup>(七六)</sup>・馬謙<sup>(七七)</sup>は隆演をおどして、たかどのに登り、倉庫番の兵を助けとして知訓をとがめて殺そうとして、「牙城の南門である天興」<sup>補註(七六)</sup>門の橋に陣を布いた。そこで知訓は戦い、しばしば退けた。朱瑾がたまたま外からやって来て、一騎にて進み、その陣を見て、「これでは「戦いを」やるまでもないわ」と言いすてた。そこで「瑾が」後をふりかえって、ひとたび差しまねくと、外部の兵が先を争い進撃して、とうとう球と謙を斬り殺した。そして叛乱の兵はみな散り散りになった。

十四年(九一七)、徐温は「昇州から」移って、金陵を統治した。

十五年(九一八)、「右都押牙」王祺<sup>(七八)</sup>を派遣して洪・袁・信三州の兵を集めて、虔・韶「二州を」攻撃させたが、長い間、攻めおとせなかった。祺が病にかかったため、「鎮南節度使」劉信<sup>(七九)</sup>に交代させた。四月、副都統朱瑾が徐知訓を殺し、自らも命を絶った。潤州「節度使」の徐知誥が「朱瑾の」叛乱を聞きつけ、兵を率いて入城し、唐の宣諭使李儼を殺して叛乱を阻止し、ついに政権を掌握した。

徐氏が政治を専断した時は、隆演が幼くて気が弱く、自分から政治を執ることができなかった。しかも知訓はとりわけ隆演をばかにしていた。以前にたかどので酒を飲んだ「時」、役者の高貴卿<sup>(八〇)</sup>に酒の世話をさせた。「その際に」知訓が参軍の役をし、隆演はぼろぼろの衣服を着、髪をたばねて、蒼鶻(青いハヤブサ)の役を演じた。知訓が以前に酒に酔っぱらって暴れ、座にいる者を罵った。「その際、知訓の」ことばが隆演を辱めた。隆演は恥ずかしくって涙を流して泣いた。それなのになお知訓は隆演を辱めた。「そこで」側近の者が隆演を助け起こした。知訓は「また」ひとりの役人を斬り殺して、ようやく治まった。「そうした行為に」呉の人々はおびえていた。知訓は朱瑾との間にも亀裂があった。「そのため」瑾が知訓を殺してしまい、彼の首を携えて馬を奔らせて役所に行き、隆演に示して、「今日、呉のためにあだを除きました」と言った。隆演は「これはわしの知ったことではない」と応えて、さっさと奥へ入ってしまった。瑾は怒って、首を柱に



